「旅への誘ひ」序説――〈追わせる〉園子と〈追われる〉明子

堀内　京

1．はじめに

川端康成と〈少女雑誌〉の関わりは深い。川端は戦前戦後の約三〇年にわたり、〈少女雑誌〉に作品を発表し続けてきた[1]。なかでも、一九三〇年代半ばから敗戦にいたる時期の川端の〈少女雑誌〉誌上での活動については、三浦卓が「昭和一〇年代の中心をしめる『少女の友』時代の川端康成は、〈少女小説〉こそが当時の主要な〈仕事〉であったとも言える[2]」と指摘するように注目すべきものがある。

しかし、研究史において川端の〈少女雑誌〉に発表されたテクスト群に、充分光が当てられてきたかといえば決してそうとは言えない。その要因としては、川端が存命中に刊行された全集や自選集には〈少女雑誌〉誌上に発表した〈少女小説〉が収められていないという事情があり、度重なり刊行された全集や自選集からの〈少女小説〉の排除は、意識的に行われてきたことであった[3]。川端の〈少女雑誌〉に発表されたテクスト群を検討するには、各々の雑誌のおかれた同時代の状況とともに〈少女雑誌〉誌上に発表された個々のテクスト分析が求められよう。

川端の「旅への誘ひ[4]」は、一九四〇年一月～九月にかけて「新女苑」に連載された未刊行のテクストである。三七巻本『川端康成全集』第二三巻（新潮社、一九八一年二月）の「解題[5]」においても「発表されたままで、長い年月うち捨てられてあつた」とあり、また川端が自らの刊本に収めなかった理由の推測として「作品の主要部分の主題ともう一度取組み直し、別の作品として仕上げた」ことを挙げている。

「旅への誘ひ」は三年後に発表された「東海道」（「満州日日新聞」一九四三年七月二〇日～一〇月三一日[6]）の「前駆」をなすテクストとして評価されてきた[7]。例えば山田吉郎に「まず注目すべきことは、『東海道』がその下敷きとなるような稿本的作品を有しているということであろう。（中略）それ（執筆者注：「東海道」連載）より三年ほど前の昭和十五年、川端は「新女苑」（1～9月）に『旅への誘ひ』という小説を連載している。この作品は登場人物や古典の取り入れ方に『東海道』と少なからぬ類似点があり、とくにその第四章「東海道の章」は明らかに『東海道』の前駆をなしている。裏を返せばそうした前段階的な模索を経た上で『東海道』の連載へと至りついているわけで、その模索の厚みを軽んじてはならないだろう[8]」という指摘がある。「東海道」の初

出は、「満州日日新聞」であるが、川端没後の一九七五年刊本に収められた[9]。つまり、未刊行の「旅への誘ひ」は、「東海道」よりも一般的には更に読者が目にしにくいテクストだといえる。

「旅への誘ひ」が「東海道」の「前駆」をなすテクストとして評価されてきた要因を整理してみよう。両テクストには市河明子という同名の女性（しかも両テクストにおいて彼女の旅の行き先が吐月峰であることなどから同じ人物だと推測される）が登場すること、「旅への誘ひ」の最終章にあたる第四章には「東海道の章」（「新女苑」一九四〇年七～九月号に掲載部分）が配されており、「東海道」と同じ古典作品や岡本かの子の「東海道五十三次」がテクスト中に引用されていることをあげることができる。

しかし、いうまでもなく両テクストは発表メディアが異なること、「旅への誘ひ」には、市河明子とは別に園子というヒロインも設定されていること、「東海道」と重なりを見いだせる第四章「東海道の章」に至るまでの「旅への誘ひ」（「新女苑」一九四〇年一月～六月）は独自の展開を見せていることを考慮する必要があるだろう。

つまり、「旅への誘ひ」は単に「東海道」の「前駆」をなすテクストという評価にとどまらないものを内包している。本稿の目的は、これまで「東海道」の「前駆」をなすテクストとされてきた「旅への誘ひ」を〈少女雑誌〉「新女苑」に発表されたテクストとして一度切り離し、「旅への誘ひ」のみに登場する園子の存在を分析した上で、市河明子の「旅への誘ひ」での役割について考えることにある。

考察に先立ち、「旅への誘ひ」の初出メディアである「新女苑」が一九四〇年に迎えていた激動の一年の一側面を確認したい。「旅への誘ひ」のテクスト中には「日本の作家生活の疲労」についての言及があるが、同時代のメディア状況を確認することは、その一端を覗くことになるとも思われるからだ。「新女苑」主筆の内山基は、後年「『新女苑』は私にとっては昭和十五年十月号を限りに死んでしまった」と回想している[10]。この時期が「旅への誘ひ」連載終了直後に当たることから推せば、「旅への誘ひ」が「新女苑」が何らかの過渡期を迎える中で連載されていたと考えられる。

「新女苑」は一九三七（昭和一二）年一月に創刊された。一九三一年から「少女の友」の主筆を務めた内山基が「新女苑」の主筆も兼務した。「新女苑」は、「少女の友」よりも成長した女性を読者として想定しており、内山による「創刊のことば[11]」でも「少女雑誌と婦人雑誌の中間的存在である」とされている。また、「新女苑」の目指す方向性については以下のように述べられている。

> 新女苑に家庭生活の巧みな処理方法をお求めになる方があれば、きつとその方は失望されるであらう。
> 又新女苑にギラ〴〵と脂ぎる、社会面的興味をお求めになる方があつたとしたら、恐らく失望されることであらう。
> 新女苑の希ふ所は、若き女性の静かにして内に燃える教養[12]の伴侶である。

創刊号は実に四〇〇ページを超えるうえに、附録がついた大変

華やかなものであった。「新女苑」の誌面の主な構成は「名作絵物語、該月詩画譜、グラビア、のちに名画紹介などを巻頭に掲げ巻末には読者文芸欄を充実して読者の参加を図る一方、長短編小説、随筆、教養と趣味欄、おしゃれ、料理などの実用記事のほか、結婚や生き方などに関する論文、座談会、フィルム・レヴュー、ブック・レヴュー欄[13]」だった。

佐藤卓己は「新女苑」が一九四〇年に過渡期を迎えた一因について、一九三九年五月号に掲載された「新しい時代の女性教育座談会」において当時の東京府立第一高女の校長市川源三の「今の日本の教育を誤まらせた大きい原因の一つは陸軍の軍隊教育にある[14]」という主旨の発言にあると指摘している。これに鈴木庫三少佐が反応し、主筆としての内山の責任を追及した[15]。

この出来事により、『新女苑』という雑誌及び内山という編集者が、彼等の要注意人物となったことは確か[16]であり、加えて、その一ヶ月後にも鈴木により「新女苑」の発行元である実業之日本社に国策協力が要望された。

「新女苑」の誌面を見渡しても、例えば一九四〇年七月号には「農村婦人は立上る」という特集が組まれ、編集後記においては「国策に参画した運動は都会地よりも農村に多く見られる。長野県浦里村はその最も代表的な例で、この村に脈うつ精神は広く都会にも取入れられて学ばれなければならない」とあり、やや誌面の趣に変化が見られる。やはり、「新女苑」にも同時代の波が押し寄せていたことは否めない。

川端は、「新女苑」において「小品欄」の選者を一九三八年一二月〜一九四三年一一月まで五年間務めていた。本稿において川端の「小品欄」選考におけるあり方について詳細に検討する余裕は持ち合わせていないが、川端の「婦人公論」や「少女の友」「新女苑」での選考のあり方を分析し、その入選作の優れたものを一冊にまとめた『女性文章』（満州文藝春秋社、一九四五年一月）刊行の過程を分析した深澤晴美は「川端の内の〈女性的なるもの〉というテーマが、〈日本〉という新たなテーマと出会い、交錯していった様がうかがえよう[17]」という興味深い指摘をしている。たしかに、「時によつては御自身の創作よりもこの仕事を愛されてゐるのではないかと思はれることすらあつた[18]」というほどに川端がこの仕事に情熱を捧げていたことに間違いはないようだ。そうであってもやはり、川端が〈少女雑誌〉に発表したテクストそのものを検討することは必要な作業であると考える。

2・上杉に明子を追わせる園子

「旅への誘ひ」には園子と明子という全くタイプの異なる二人の女性が配されており、この二人は、四〇前の作家の上杉を軸に描かれる。

まずは「旅への誘ひ」の全体像を捉えてみたい。作家である上杉は、妻絹代の一周忌が過ぎた或夜、園子に絹代と新婚旅行で宿泊した宿屋へ連れて行ってほしいと懇願される。上杉には「日本の作家生活の疲労が、妻の死といふ弱り目から、どつと襲ひかか」っており、「なにか生れながらの悲しみと、いつも癒されぬ心の飢ゑとに、追ひ迫られ通し」のような心情を抱えて生活している。園子は、病床の絹代の代わりに子どもの早苗の面倒を見させるた

めに絹代の実家が寄こした娘で、絹代のいとこにあたるが、孤児であったために絹代の家に養われてきたという境遇にある。年末、早苗も連れて三人で新婚旅行先の箱根と熱海を訪れた際、上杉は熱海ホテルで「匂ふ光のやう」な美しい令嬢市河明子を見かける。養生のため熱海ホテルに一人で滞在している明子の美しさは、上杉に憧憬をかきたて「地に伏したいやうな悲しみ」さえ起こさせる。このような上杉の心情に「目ざとい」園子は、明子に近づく。元旦、上杉と園子、早苗は蒲郡にいた。熱海ホテルのボオイから「正月の熱海は雑踏するから蒲郡へ行く」ということを聞き、明子を追いかけてのことだった。春、明子から園子宛に「東海道の一筋も知らぬ人、風雅に覚束なし」と芭蕉の言葉を書いた箱根小涌谷から桜の絵葉書が届く。その内容は健康を回復したらしいから、春の東海道を少し歩いてみたいというものだった。園子の置き手紙に騙され、上杉は明子を追い、再度旅に出発する。

さて、「東海道」においても同名で登場する市河明子については、これまでの先行論で「東海道」とのつながりにおいて度々その重要性が指摘されてきた[19]。しかし、先にも述べたように、「旅への誘ひ」は、第四章「東海道の章」を迎える以前にも初出では既に全八回中五回の連載がなされており、明子の登場等「東海道」と通底する部分を含意しながらも独自の展開を見せていることを忘れてはならない。

そこで、上杉と共に見逃すことができないのが「旅への誘ひ」にのみ登場する園子の存在である。「東海道」は、古典作品の引用がテクストの大半を占め、「登場人物や事件の展開について、さしたる波乱は存在しない[20]」と評されるテクストであるが、それとは対照的に「旅への誘ひ」は上杉が妻の絹代の死後も、妻となるわけでもない園子と不安定な関係を続け、しかも園子に騙される形で上杉が再度旅へ再出発し、明子を追いかけるという展開を持つ。

つまり、「旅への誘ひ」はある種の事件性を有するテクストであり、このような事態を引き起こす園子の存在には注意を払う必要があるのではないだろうか。

園子とはどのような人物なのか。絹代は生前上杉に「園子と結婚してはいけない、あなたが不幸になる、私の嫉妬ではない」というような言葉を残す。上杉は絹代の死後、子どもの早苗は「血のつながる人々と、よくつき合はせてやらう」と思っていたが、悔やみもそこそこに早苗を哀れがる親類たちには「胸が悪」くなる。園子は上杉の家に残り、後妻となることもなく上杉と暮らし続ける。園子は「人目に立つ娘で、振り返られたりすると、ちよつとしなをつくる」娘であり、早苗の子守はよくするが、「主婦の代りには全く不向き」で「血なまぐさいやうに女くさ」く、「愛するものがあると、放恣に自分をくれてしまふ」ところがある。そして「園子のからだの奇怪に激しい愛は、上杉に女の宿命のあはれさを感じ」させる。上杉はこのような園子を「物がたい女達からあなどられてるやうな女は、男にとつて、かへつてありがたいものでもある」と実感し、絹代との新婚旅行の宿に行きたいと園子が言い出したのも「園子らしい捨身の愛情なのかもしれな」いと受け止めているところがある。

このように媚態を示し、「奇怪に激しい愛」をぶつけてくる園子は、上杉が熱海ホテルで見かけた市河明子に対して憧憬の念を

抱いていることを見逃さない。明子に近づくために給仕から明子の滞在理由を聞き出そうとする園子に対して上杉は「きびしい嫌悪」を感じる。しかし、園子は明日中に自分が明子の「手を握」ってみせると言い出す。上杉は「どういふつもりなのか」といぶかりつつも、「園子の魅力がまつはりついて来」ると感じずにはいられない。

ここで留意すべきことは、明子の魅力に上杉が憧憬の念を抱いている時においてもなお、園子の魅力は決して消えるものではなく、むしろ明子の魅力を凌駕する勢いで上杉に迫っているということである。

つまり、上杉が明子への憧憬を強めれば強めるほどに園子の魅力は上杉のなかでより強固なものになる。

蒲郡での元旦の挨拶にはそのような二人の関係性がよく表れている。

「明けましておめでたうございます。本年も相変りませず……。」

上杉は思ひがけなかつた。

園子は頭をさげたまま、口ごもつた。

「……御一緒において下さいませ。」

このようなことを言い出す園子に、上杉は「園子はそのよさが女にはわからない女」であることを再認識する。「たとひ行く末、園子とどうならうとも、或年の元旦の朝に、一人の女がさう言つたことは、生涯忘れられるものであるまい」というように、園子は上杉の「いつも癒されぬ心の飢ゑ」を極めて瞬間的であったとしても救済することが可能であるかのような存在として表出する。

しかし、そのような園子であるが、上杉に「奇怪な」と受け取られる行動を起こす。上杉は明子から葉書が来たことで「直ぐにも箱根へ、明子を追つて行かうと思」いながらも、それを実行せずにいた。園子は上杉が留守の間に、次のような置き手紙をして早苗と姿を消す。

――（一足お先に、早苗ちゃんをつれて、箱根へ参ります。お後から、すぐにいらして頂戴。三河屋で、お待ちしてをります。園子。）

結果的に園子は、絹代の実家に戻っただけであったが、この園子の手紙に騙される形で上杉は再度旅へ出発し、東海道へと向かう。

つまり、上杉は再度園子によって旅に出発させられるのである。電話をかけてきた園子の『あれは……ああしなければ、あなたが箱根へいらつしやらないからよ。うまいことだまして、行かせてあげましたのよ。』という言葉に上杉は「呆然」とさせられる。そして、そのような園子の言動を上杉は「狂気に近いとしか思へないものの、そのあはれさのなかには、上杉に反逆を強ひるやうな、なにかが含まれてゐ」ると感じることとなる。この場面は「旅への誘ひ」第四章「東海道の章」の前半部分にあたる。この先、上杉は市河明子を追いかけて、箱根の「関所」を越えて東海道を西に歩を進める。

以上、整理してきたように、媚態を示し、「そのよさが女には

わからない女」として「奇怪な愛」を持ちながら上杉とあいまいな関係を続ける園子は、一見上杉にとって都合の良い女性として造型されているようにも見える。

しかし、園子は上杉が憧憬を抱く明子に近づき、上杉が明子に近づいていくその只中にあっても自らの魅力を「まつはりつ」かせるような女性で、なかでも留意すべき点は、園子に騙される形で上杉が再び明子を追うことになる、という構図である。

そもそも、絹代との新婚旅行先に行きたいと言い出すことで上杉が明子と出会うことになり、上杉は園子によってさらに明子を追わされる。つまり、園子の主導の下上杉は明子を追って東海道に再出発する。それはまるで、上杉が明子の魅力に触れれば触れるほど、上杉が自分の魅力を享受することを園子が知っているかのような振る舞いでもある。

従って、上杉が自発的に明子を追いかけたのは、熱海から蒲郡へ向かった時だけであり、それ以外は園子が主導して上杉を明子へと誘導（＝追わせる）する存在となっている。園子は「哀願するかのやうに、明子のあとを追つて行けと、繰り返」す。一方、上杉も「僕は明子さんの後を追はうとすると、一層園子が哀れに思へて、一刻も早く帰りたくなる。さうして反対の方へ行く。自分の悲しみを深め、園子への愛を強めるためかのやうに」というように、やはり明子を追うほどに園子への愛を強めている。

「旅への誘ひ」と「東海道」のつながりを考慮する際には、第四章「東海道の章」の検討が最重視されることは首肯されるところであるが、東海道に上杉を導く「旅への誘ひ」の園子の機能は、さらに検討されてもよいはずである。

3・西へ——上杉に追われる明子

これまで見てきたように、園子が媚態を示し「奇怪な愛」を持つ女性であれば、市河明子は全く逆のタイプの女性として捉えられよう。深澤晴美は、「旅への誘ひ」の連載が始まる直前の「新女苑」に掲載された川端の「神秘」[21]と題する文章中の「崇拝すべき女性」という言葉に着目し、川端が志向した「崇拝すべき女性」像を市河明子に体現させようと試みたとを述べている[22]。たしかに、「旅への誘ひ」の明子は上杉の憧憬の対象であり、このように読み取ることは可能である。

しかし、このテクストにおける明子の役割を考慮したとき、それは「崇拝すべき女性」のみに収斂されるとも限らない。ここでは、「旅への誘ひ」において上杉が市河明子に対して抱く憧憬の内実をさぐり、このテクストにおける明子の役割について考えていきたい。

まずは、明子の人物像を確認していく。上杉（と園子と早苗）は熱海ホテルで明子と出会う（熱海では明子の名前は明かされることなく一貫して「令嬢」と表記されているが、本稿では便宜上熱海における場面も明子と表記する）。上杉が初めて目にした明子は「突然美しい音楽を聞くやう」で「匂ふ光のやう」に見える。上杉は「遠いあこがれに誘ひ出されて、うつとり」する。明子の髪からは「古典なやさしさ」が感じられ「地に伏したいやうな悲しみ」を上杉は抑えられない。

明子を追っていった蒲郡（「蒲郡の章」）で上杉は目論見通り明

子と再会する。元旦に明子は素焼きの大きな花甕に一人で写経をしていた。上杉は楽焼小屋に急ぐと、まさに明子の写経が書かれた花甕が窯で焼かれているところでり、文字が浮き出してきた。

「二十二歳正月、蒲郡にて、市河明子。」

と、上杉は小声で読むと、もの狂ほしい愛情がこみ上げて来て、われ知らず、花甕に手をかけてゐた。愛する人の首を抱くかのやうであつた。

上杉は花甕を土間に落として割ってしまうが、この場面を楽焼小屋の入り口で見ていた明子と上杉は初めて言葉を交わし、明子は写経の残る割れた花甕を棄ててほしいと言う。上杉が明子と直接言葉を交わす描写はこの場面だけである。

「東海道の章」においては明子から園子宛の葉書が届くことに端を発して、上杉は園子に騙される形で明子を追い、購入したばかりの「東海道に関係のある本」を持ち再度旅に出るが、絵葉書の三河屋に明子の姿は既にない。女中から明子が箱根に向かったことを聞いた上杉は更に明子を追い西に向かう。

明子さんとは、僕にとつていつたいなんであらうか。そして、僕に明子さんを追つて行かせる力は、いつたいなんであらうか。そんなものは二つとも、現実にありはしないのだ。幻影に過ぎないのだ。

東海道のどこかの松並木を、あこがれの美女が歩いてゐる。

上杉は明子を追いながらも再会することのない明子を「幻影」だと捉えており、明子を追えば追うほど実在する「園子への愛を強めるためかのやうに」園子のいる東京とは反対の西に行く、ということを自覚するようになる。

明子の後を追い、吐月峰に到着した上杉は寺の僧から『（略）今朝のお嬢さんは、洋服の姿に似合はず、ゆかしい方ですな。道は滅びないものだと思ひました』という話を聞き、「僧が道というのは、旧東海道のことか、または精神の道のことかと」考える。

つまり、このあたりから明子がただ単に上杉の憧憬をかき立て、東海道をさらに西へ導く存在であるばかりではなく、上杉に時を遡行させる役割も果たしていくことになる。

留意すべきことは、そこには明子が読んでいた書物である「海道記」のような古典作品や岡本かの子の「東海道五十三次」が介在することである。このような役割は、媚態を示すタイプの園子に務まるものではない。

吐月峰を後にしても上杉が明子に再会することはない。

明子のうしろ姿が見えたら、声をかけずに、黙つて見送つてゐて、さうして東京へ帰らう。そのやうな感傷にも、上杉はすがすがしく心が明るむのだつた。

園子に騙されて明子を追っていた上杉は東京に帰ることになりそうな終わり方だが、明子は更に東海道を西に進んでいるのか、定かではない。この結末は、「新女苑」の読者には「浪漫」的な雰囲気として歓迎されたようであるが[23]、三年後に執筆される「東

海道」との繋がりを川端がこの時点で意識していたかは推測の域を出ない。

ともあれ、上杉は明子を追い、東海道を西に進むことによって、明子が読書していた書物を通じて時を遡行する志向を見せ始める。それは、結果的には大量の古典作品をを用いながら「日本の国土に対する愛情を確かめ」ている「東海道」における植田と地続きの志向であるのかもしれない。

このように考えたとき、「旅への誘ひ」における明子の最も重要な役割は、やはり上杉を東海道を西に導くことにあるように思われる。さらに上杉は、明子の読書する書物を通して時を遡行する志向を強めるが、それもまた東海道を西に向かわなければ起こらなかったことである。「東海道」との接続を考える上で、これらのことは重要視されるべきではないだろうか。

4・おわりに

一九四〇年の「新女苑」が迎えていた転機の一側面を確認した上で、これまで研究の俎上に載る機会にあまり恵まれてこなかった「旅への誘ひ」について、園子と明子という全くタイプの違う二人の女性たちに焦点をあて、その役割について考えてきた。

園子は、上杉と生活を共にし、「奇怪に激しい愛」をぶつけ、上杉の「いつも癒されぬ心の飢ゑ」を極めて瞬間的であったとしても、救済しうる存在として描写されている。そのような園子は、上杉から「そのよさが女にはわからない女」と評される。園子は終始媚態を示す存在として描かれている。留意すべき点は、上杉への〈旅への誘ひ〉はほとんど園子によってなされており、時には上杉を騙す形で旅へと誘導するということにある。園子は自らが誘導し、明子を追わせることで、上杉がより一層自分への「愛を強める」ことを自覚しているかのように、上杉を旅へと誘う。

一方、明子は一度たりとも上杉に触れられることはなく、言葉を交わすことも僅かである。結末においても、明子と今後接触する意志が上杉から示されることはない。明子は、一貫して憧憬の対象として描かれており、旅人として上杉から追われる存在である。作家である上杉は、園子に騙されて再度旅へ出発する前に古本屋で「東海道に関係のある本」を買い集める。最終章にあたる第四章「東海道の章」では吐月峰に行き、それらの書物を通じて、上杉は時を遡行する志向を持つようになる。明子も書物（特に東海道に関する書物）と親和性が高い人物であると示されることで、「東海道」において明子がわずかに言及される際にもその接続は自然な形でなされることになるのだろう。[24]

このように、まったく違う性質の女性を配置することで、上杉が明子に抱く「あこがれ」と園子に抱く「そのよさが女にはわからない女」という差異がより一層強調されて表出するという効果があるのではないだろうか。上杉を〈追わせる〉女性＝園子と、上杉に〈追われる〉女性＝明子という全くタイプの異なる二人の女性が存在することで「旅への誘ひ」は成立している。

そこで再確認されることは、「旅への誘ひ」において園子の果たす役割は小さなものではないということだ。殊に「東海道」との関わりにおいて明子の存在は重視されてきたが、だからといって「旅への誘ひ」のみに描かれる園子の存在が捨象できるもので

はない。よって、「旅への誘ひ」と「東海道」との接続について考慮する視座を有しながらも、「旅への誘ひ」を独立した一つのテクストとして捉える必要性があると考えている。

このような立場から、本稿は「旅への誘ひ」を「東海道」とのつながりから一度距離をとり、一テクストとして捉えた試みである。

「旅への誘ひ」が発表された頃の「新女苑」の周辺については更に調査が必要であり、女性誌である「新女苑」上でタイプの異なる園子と明子がどのように読者に解釈されていたかを追及することも今後の課題となる。加えて「旅への誘ひ」を一テクストとして捉えたうえで、やはり「東海道」との接続も考慮が求められよう。「東海道」への発展の過程で、園子にあたる存在はなぜ消失するのだろうか。明子の葉書のなかにある「故郷をさがし歩いてゐる」という言葉の重みや、テクストのなかに引用された岡本かの子についても丁寧に分析する必要性もある。それらについては別稿を期したい。

【注】

（1）例えば、羽鳥徹哉「川端康成解説」（『日本児童文学大系』第二三巻、ぽるぷ出版、一九七七年一一月）では川端の〈少女小説〉について次のように述べられている。「川端が少年少女を対象として書いた最初の作品は「薔薇の幽霊」（『少女世界』、昭和二年一〇月）だと思う。（略）川端には、少年少女小説、というより少女小説の、三つの開花期があった。第一は、昭和七年から十一年に至る『少年倶楽部』時代、昭和十二年から十七年に至る『少女の友』時代、昭和二十四年から三十年に至る『ひまわり』時代である」。

（2）三浦卓「〈私たちだけの世界〉の行方――『少女の友』の読者ネットワークと川端康成――」（「近代文学合同研究会論集」第3号特集「〈講談社〉ネットワークと読者」二〇〇六年一二月）

（3）注（2）に同じ。三浦は「『少女の友』のコミュニティーと川端康成「美しい旅」――〈障害者〉から〈満洲〉へ――」（「日本近代文学」二〇〇九年五月）においてもこの点について分析している。

（4）「旅への誘ひ」は、次のように発表された。

第一回「旅への誘ひ」「出発の章」（「新女苑」一九四〇年一月）

第二回「旅への誘ひ」「箱根・熱海の章」（「新女苑」一九四〇年二月）

第三回「旅への誘ひ」「箱根・熱海の章（つづき）」（「新女苑」一九四〇年三月）

第四回「旅への誘ひ」「蒲郡の章」（「新女苑」一九四〇年五月）

第六（ママ）（五）回「旅への誘ひ」「蒲郡の章（つゞき）」（「新女苑」一九四〇年六月）

第七（ママ）（六）回「旅への誘ひ」「東海道の章」（「新女苑」一九四〇年七月）

第八（七）回「旅への誘ひ」「東海道の章（つゞき）」（「新女苑」一九四〇年八月）

第九（ママ）（八）回「旅への誘ひ」「東海道の章（つゞき）」（「新女苑」一九四〇年九月）

（5）「解題」（『川端康成全集』第二三巻、新潮社、一九八一年二月）

（6）川端康成「東海道」（「満州日日新聞」一九四三年七月二〇日～一〇月三一日）うち休載日（七月二六・二八日、八月二・七～一一・二三・二七～三一日、九月四～一七・二〇・二七・三〇日～一〇月二四日）国会図書館にて調査を行ったが、七月三一日は欠号のため確認ができなかった。

（7）平山三男「「哀愁」論――川端に於ける戦争の意味――」（『川端康成研究叢書10　孤影の哀愁』教育出版センター、一九八一年一〇月）などで言及されている。

（8）山田吉郎「川端康成『東海道』の構造――『旅への誘ひ』との対比を視座として――」（『川端文学の世界2　その発展』勉誠出版、一九九九年三月）

（9）川端康成『天授の子』（新潮社、一九七五年六月）

（10）内山基「新女苑挽歌」（『編集者の想い出』モード・エ・モード社、一九八三年一〇月）

（11）内山基「創刊のことば」（「新女苑」一九三七年一月）

（12）「新女苑」において追求された「教養」については小平麻衣子「教養の再編と『新女苑』――川端康成の投稿指導にふれて――」（「日本近代文学」二〇一四年五月）に詳しい。

（13）橋詰静子「新女苑」（日本近代文学館編『日本近代文学大事典』第五巻新聞・雑誌　講談社、一九七七年一一月）

（14）注（10）に同じ。「座談会　新しき時代は女の教育を必要とするか」（「新女苑」一九三九年五月）における市川源三の「軍人だとか、教育のことに理解のない人人が、女にさういふ知識を授けても、たゞ理屈をいふだけで役に立たないといつたのが始まりなんでせう」という発言を指すものと思われる。

（15）佐藤卓己『言論統制――情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』（中央公論新社、二〇〇四年八月）

（16）注（10）に同じ。

（17）深澤晴美「『新女苑』における川端康成――戦時下の一側面」（「和洋九段女子中・高等学校紀要」一九九七年三月）

（18）神山裕一「感謝」（「新女苑」一九四三年一一月）なお、内山基は、一九四〇年一〇月で主筆を辞し、その後神山（二代目主筆）に交代した。

（19）注（8）山田論では「（略）ここで注目しなければならないのは、『旅への誘ひ』における市河明子なる女性に作者川端がそもそもどのような意味を付与しようとしたのかということであろう。それを明らかにすることが、わずかな間接的登場にとどまるものの『東海道』の作品構造を解く鍵とも目される市河明子の存在意義を把握することに根で結びつくと思われる」と述べられている。

（20）注（8）に同じ。

（21）川端康成「神秘（仮題）」（「新女苑」一九三九年一二月）深澤晴美が注（17）において川端の全集未収録文の新資料として発表した。

仮りに題して神秘といふが、普通の意味の神秘なるものを書かうとするのではない。女性崇拝といふやうな意味を、こ

の言葉によつて現はさうと考へたのである。前から私は神聖な女性、女性のうちにある聖なるものを書いてみたいと思つてゐた。その材料はまだ十分熟してはゐないけれどもとにかく着手してみよう。

日本の文学の女性は大体卑俗であつて、青春の泉となるべき聖なる高さが乏しいやうである。遺憾なことの一つである。私自身も今のところ、崇拝すべき女性を現実に知らぬので、書きにくいと思ふが、試みのうちからなにか生れて来るかもしれない。

(22) 注(17)に同じ。

(23) 「ペンルーム」(「新女苑」一九四〇年一一月)

(24) 「東海道」において市河明子は、高等学校の国語の教師をしていた植田建吉が書いた「日本の旅人」という本を読んだ女性として次のような文脈で登場する。

「『日本の旅人』を読んで、いい手紙をくれた、あの市河明子」。「日本の旅人」は、「古典にあらはれた、日本人の旅の心を調べたもの」と説明されている。

＊本文の引用は、すべて三七巻本『川端康成全集』第二三巻(新潮社、一九八一年二月)に拠った。なお、初出題目等を確認するため適宜初出も参照した。

(ほりうち・みやこ　千葉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程在学)